

【特別報告】

”令和の真っ只中に居て”

大宰府万葉会 代 表 松尾 セイ子氏

皆様こんにちは！令和元年おだやかな佳き日、ふくおか文化ボホランティアフォーラムがこの太宰府の国立博物館にて開催されますこと、有難く思っております。

しかも、思いがけなくも“令和の真っ只中に居て”というテーマをいただきました。

私はいつも戸惑いながら梅花の歌の大切さを私なりに、わかり易く語りついでおります。

大宰府万葉会の松尾と申します。どうぞよろしく願いいたします。

4月1日、新元号が国書日本最古の万葉集「梅花の歌の序文から」と、発表されました。

私はひとりテレビの前で大きな拍手をし、この大好きな序文を口ずさんでいると突然電話が鳴り響きびっくりしました。

電話に出てみますと ”おめでとう！長い間ご苦労され、万葉集を続けられて良かったねえ〜”と。 また同時に玄関には新聞社の方がおいでになり”電話が通じないので来ましたよ”と言うことでした。他にも電話で、お祝いの言葉に、私自身は戸惑いながら嬉しくお受けいたしました。

さらに、市役所の方でしょうか“すぐに大宰府政庁跡に来てよ、来てよ”と云うお電話がございましたので、取りあえず私は万葉衣装を数着持って駆け付けました。

政庁跡では早速、序文の「令和」と梅花の歌を会員数人と朗詠しました。

太宰府の喜びと、多くの報道陣に囲まれる嬉しい悲鳴の有り様が夕方まで続きました。その実情から、令和の記念に5月1日はどうしても大伴旅人卿の梅花の歌を再現したく思いました万葉の会の会員、知人に声をかけました。するとたちまちのうちに、60人集まりました。

幸運にも万葉博士に、声援とご指導をいただき参加者は大宰府政庁跡の素晴らしい緑の風景のなか、絵巻のような色鮮やかな万葉衣装を身につけて古代大宰府のエリート官人に成りきって一人一人堂々と詠唱する姿に感動いたしました。

皆様もテレビや新聞で見て頂いたことと存じます。有難く思っております。

私たちは万葉衣装を10年かけて、今、羽織っているような衣装を100人分作ってきましたが、皆様が着て喜んでいただいている姿に”ああやっぱり苦労して100人分作っていて良かったね”と言いながら、少し涙をにじませながら喜んだことでした。

さて、万葉時代以前は日本には文字がなく、中国の漢字を借りた万葉かなで表記されています。私達は小さな市民団体ですが、文字文化の源点と『万葉集』筑紫万葉歌壇の大切さを語り継いで、平成9年から20年余りになります。

「令和」発表以来、直ぐに大宰府万葉会の講演では、『「令和」のこころと「楽し」』とした

講義内容を高岡市万葉歴史館館長の名誉教授坂本信幸先生に依頼いたしました。「梅花の歌では、さまざまな悲しみを乗り越えた大伴旅人が新しく生きることを求めた催しであった」と、言われています。

それは神亀4年、大伴卿は63才で藤原氏による太宰府への左遷だったとも言われています。年老いた身で旅の疲れが出たのか、翌年の夏、大伴郎女（奥様）が亡くなりました。万葉集巻5の巻頭は妻を亡くし、更に都からの訃報の知らせを聞いた旅人の悲しみ嘆きの歌から始まります。

793番 世の中は空しきものと知る時し いよよますます悲しかりけり

この深い悲しみに沈んだ旅人は、翌年天平3年、お酒をたたえる13首を創作します。

349番 生ける者遂にも死ぬるものにあれば この世なる間は楽しくをあらな

この人間の生き方にかかわって、楽しい世界を、それを政治の世界から離れた風雅の楽しさこそが旅人の余命の中で求められた世界であった、との講義を先生方からお聞きしております。

それに天平2年正月の歌は、旅人卿の思いをはっきり示す宴でもありました。

今から序文を詠みますので皆様も一緒にどうぞ詠って下さい。

我々の会の女官と一緒によろしいでしょうか。

### 梅花の歌三十二首あわせて序

天平二年正月十三日に、帥老（そちのおきな）の宅に集まりて、宴会を申ぶ。

時に、初春の令月にして、気淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を抜き、蘭は珮後（はいご）の香を薫らす。加以、曙の嶺に雲移り、松は羅（うすもの）を掛けて傾く、夕の岫に霧結び、鳥は薄物に封じられて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空に故雁帰る。

ここに天を蓋とし地を坐にし、膝を促け觴（さかづき）を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。

もし翰苑（かんえん）にあらずば、何を以てか情を攄（の）べむ。

詩に落梅の篇を紀す、古と今と夫れ何か異ならむ。宜しく園梅を賦して聊かに短詠を成すべし。

「初春の令月と気淑く風和らぐ」から「令和」の年号が決まりました。

京都大学大学院准教授の佐野先生は「令和」とは、「積極的に平和にしたい、幸せを永遠に求めていきたいというような意味を持っているでしょう！」と、講義されています。

序文の内容は太陽暦で730年2月8日、今から1290年前のことです。

太宰の帥大伴旅人卿の邸園に、正月のおだやかな佳き日、梅は鏡の前のお化粧真っ白い粉のように咲き、お部屋には蘭の香りが匂い袋のように漂っている、その雰囲気の中で色鮮やかな官位の衣装を身に着つけ大勢の高級官僚は天を屋根とし地を座席として言葉も要らぬぐらいに寛いでゆったり楽しんでいる、お互いに膝を近づけて盃を酌み交わし主人（あるじ）旅人は当時大変珍しい白梅でおもてなしをし、庭の梅をみて”落梅の歌を詠みたまえ～”

皆は深く一礼し、最後の小野の淡理の司会で一人ずつ歌を朗詠していきます。

始めに大式紀卿は、その幸せを招きよせ、みなさん今日はゆっくり精一杯楽しみ、つくしましょう、と主人の意思を理解し、梅歌の宴として開始の挨拶をいたします。

皆様も一緒に詠って下さい。

8 1 5 正月立ち春の来たらば かくしこそ梅を招きつつ 楽しき終えめ

次の小野大夫さんは素晴らしい梅の花はいつまでも幸せがとどまって欲しいことを歌っております。

8 1 6 梅の花今咲けるごと散り過ぎず わが家の園にありこせぬかも

次は緑の美しさを愛でる歌をうたいます。

8 1 7 梅の花咲きたる園の青柳は 蔓にすべくなりにはけらずや

次の山上憶良は妻を失くした旅人の悲しみの心を慮り、歌でこの梅の花を一人で見ながら春の日を暮らすのですか、と同情の歌でしょうか。

8 1 8 春さればまず咲く宿の梅の花 独り見つつや春日暮らさむ

憶良の歌に少し痛みが沈んできますと、次の若い二人は道化役として、梅の花今が盛りなり盛りなりと云って宴をなごましていきます。

8 2 0 梅の花今盛りなり 思ふどちかざしにしてな 今盛りなり

高い位で出家した観世音寺別当笠沙弥は若手の歌を受けて、青柳も梅花も髪にさし楽しくうまい酒を飲んでしまったらもう散ってもいいではないか、気にするなよ、と親友として又僧侶として、無常の歌でしょう。

8 2 1 青柳梅との花を折りかざし 飲みての後は散りぬともよし

この歌には妻を亡くした主人、旅人の悲しみを慰め和ませる歌も各々詠んでいます。さて旅人は、我が園に梅の花散る、大空の天から雪が地上の喜び楽しむ人の上へ舞い落ちてくる梅は、亡き妻に捧げる思いやりと幸の時を求める願いが込められているようで、旅人の人柄と教養の深さが滲み出る壮大な歌です。ご一緒にどうぞ

8 2 2 わが園に梅の花散る 久方の天より雪の流れ来るかも

次の百代さんは旅人の梅の花散るに対し、梅の花はどこに散ってますかこの大野城の山には雪が降り積もっておりますよ。上手な話題で反論し宴の楽しさを盛り上げていきます。

8 2 3 梅の花散らくはいづく しかすがに此の城の山に雪は降りつつ

次からは宴を和ませる歌が続きます。

8 2 4 梅の花散らまく惜しみ わが園の竹の林に鶯鳴くも

続きまして

8 2 6 うち靡く春の柳と わが宿の梅の花とを如何にか分かむ

薬師 張氏福子は梅が咲いて散ったら次に桜が咲くではないか、と梅と桜の取り合わせで一枚の絵のような面白い歌で上席の歌をまとめていきます。

829 梅の花 咲きて散りなば 桜花 継ぎて咲くべく なりにてあらずや

次からは後半の下席になりまして、筑前介は憶良の配下で三十二首の真ん中で、ただ一人万代にと日本的な言葉で表現しております。そして千年万年永遠に幸が続き、それを留めたいと主催者旅人に感謝し、出題花としての梅を称えて最高の喜びを歌にします。

830 萬代に年は来経とも 梅の花絶ゆることなく咲きわたるべし

次からは大宰府官人の歌がつづいて宴を盛り上げていきます。

楽しく歌がつづきますが、時間の都合がありますので次に続けます。

832 梅の花折りてかざせる諸人は 今日の間は楽しくあるべし

憶良の配下で心得て鶯を旅人の心とし、梅を妻に重ねて永遠に咲き続けますから、と旅人卿を慰めるかたちで感謝し、旅人の心情を代弁した歌でしょう。

845 うぐいすの 待ちかてにせし 梅が花 散らずありこそ 思ふ児がため

宴の最後の歌としてうぐいすの”う”で始まりまして思ふ児がため”め”で終わりました。

”うめ”梅で宴会を締めくくっているのが宴の最後の歌でございます。いちばん最後の淡理さんは司会役でございますので、神様に捧げる尊い命、梅の花をかざして。

この宴を巧みに歌い継いだ大宰府のエリート官人の素晴らしい歌を司会役として明るく閉じていきます。

846 霞立つ長き春日をかざせれど いやなつかしき梅の花かも

終わりに令和の心は梅花の歌三十二首の文脈から汲みとってみますと、妻を失くした大伴旅人卿を囲んで悲しみを慰め和ませようとする出席者の心情、そして穏やかで幸せな時間が永遠に続きますようにとお願いが込められているようです。

また宴席の場として若い役人が面白く可笑しく盛り上げて、ゆったりしております。

落梅の篇としての主題花旅人の歌、梅が花散ると云うことで亡き妻へ捧げるもので、献歌でございます。高級官僚はこの太宰府で中国風の遊藝を楽しみ旅人や憶良を中心に自分たちの文化和歌を用いて政争も無い政治も戦いも無い風雅な穏やかな宴を企画しその実情を中央政庁に伝えたかったのではないのでしょうか。旅人は悲しみを乗り越えてこの新しい風雅の世界に自分の余命こそ、これを楽しく生きることを求めた世界でもあります。

私たち大宰府万葉会は、京都大学の佐野宏先生の素晴らしい講義と坂本信幸先生（奈良女子大学名誉教授）の講義の中から学ばせていただきましたことを私なりに今日はわかり易く話をさせていただきました。

この梅花の宴は、筑紫歌壇の人々に感銘を受けた10歳程の大伴家持はこの太宰府の歌を基盤とし、成人してから万葉集編纂に関わる大歌人となりました。

最後の歌の方にありましたが、もう時間がないので終わりにさせていただきます。

平成の時代、全国に災害が多く悲しみ苦しむ人々が多くありました。

どうか令和の時代を穏やかに和みつつ、お互いに肩を寄せ合い幸せを願っていききたいものです。

私達はこの令和、万葉集の筑紫歌壇を誇りとして、未熟ですがまだまだ時間の限り語り継いでいきたいと思っています。

今日は、言葉不足も沢山ございましたけれど、皆さんご清聴まことに有難うございました。



2019年5月1日大宰府政庁跡で行われた“梅花の宴”



太宰府市役所前に建立された“令和の歌碑”と  
「大宰府万葉会」の皆さまによる除幕式